



令和3年11月2日

学校だより

東京都立石神井特別支援学校長
柳澤 由香

考え、判断し、学びを深める

日増しに秋の深まりを感じる紅葉が美しい季節となりました。一昨年までは、この時期は、移動教室等の宿泊学習が続く時期でしたが、今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、宿泊をしない形で、その時の状況下で可能な内容の代替活動を実施しています。

中学部2年生が実施した「一泊二日宿泊防災訓練」は、当初は、区の防災学習センターへ行って体験学習をしたり、岩手県から講師の方を招聘して防災講話を伺ったりする予定でした。しかし、感染拡大が厳しい状況下となったため、宿泊なしで、防災学習センターの職員の方に出勤学習をお願いし、学校にて小集団にグループ分けをして起震車で地震体験や初期消火訓練、応急処置訓練等を体験したり、非常食を作ったり、オンラインを活用して防災講話を伺ったりする形にしました。生徒たちは、事前学習時より防災について関心を高め、災害が起きた際に身を守る行動や適切な避難の方法等について緊張感をもって学んでいました。

防災講話の講師を依頼した齋藤真先生は、現在、岩手県教育委員会に勤務されていますが、東日本大震災の時は、海の近くにある釜石市立東中学校で教員をされていました。隣の小学校の児童も合わせて600人近い児童・生徒たちとともに地震による津波から逃れるために地域の方と情報を収集しながら走って避難した様子や少ない物資で共に助け合って避難生活を送ったこと等を、時折、生徒にクイズ形式で質問をしながら教えてくださいました。「避難先で渡された一袋のポテトチップス、どのようにして分けたでしょうか？」等の問いに、生徒たちは真剣な表情で正対しながら考え、判断し、回答していました。事後学習で、実際に大きな災害と向き合った先生の貴重な講話を伺って、自分たちは「どんなことをしたい」「どんなことができる」と思うか、話し合いました。「非常食や水、事前に必要なものを準備しておく」「避難訓練を頑張る」「体力をつける」「友達と仲良くする」等、日頃から備え、培うことができることについて、「頭を守る」「早く避難する」等、災害発生時の適切な避難行動について、「小さい子に大丈夫だよと声をかける」「避難所に行ったら、食料配りのお手伝いをする」等、災害後に自分たちができること、他者との協力について等々が、あげられました。協働し、自助・共助について等、安全安心についての意識の醸成や心の育ちが窺えました。

先日、東京で夜、地震があった翌朝、生徒が「先生、昨日、地震があったね。『頭を守る』だよ。直ぐにやったよ。」と両手を頭の上に乗せながらキラキラした瞳で話しかけて来ました。これからも、様々な経験や積み重ねを通して、考え、判断する力を育み、生活の中で、生きた力としてはたらく学びを大切にしていきたいと思えます。